

んぼを作っても思うように水がのらないため」(⑩大曲)、「田に水を持って来てても入らないので、ある程度下げなければだめだから」(⑪大曲)、「田地の改良」(⑭大曲)、「田地の改良が目的で、副産物として燃料にした」(大曲⑮)、「田を低くするため」(⑯大曲)、「田にする前段階として採掘」(⑰大曲)、「田を低くするため」(⑱土手内)「田地の改良が第一の目的」(⑲土手内)、「土が膨れたところからサルケを取り除いて客土」(⑳土手内)、「田が高ので、低くするため」(㉑土手内)、「採らないと田を作れない」(㉒土手内)という証言からわかるように、多くの人々は、田地の改良が採掘の第一の目的であったと語っている。

津軽と下北3地域での採取目的の違いには、開発の歴史的時代的経緯が深く関わっていると思われる。津軽地方の新田地帯は、藩政期に開墾された場所であり、長い年月をかけて田がかたちづくられていった地域である。対して、下北の3地域はいずれも明治後期に開拓が始められた場所で、当時はまさに土地開発の試行錯誤のただなかであった。後者にとって、サルケが土地改良にともなう「副産物」として位置づけられたのも当然のことである。

いっぽうで、3地域の住民のなかには、燃料としての用途を第一の目的として語る者、あるいは燃料採取と土地改良をともに第一の目的とする発言もあった。「燃すのが目的だから、燃えないとダメだ」(①金曲)、「燃料の採取が目的で、客土をするようになったのは後の時代。それ以前から燃料として用いていた」(⑫大曲)、「燃料であり、田の改良を兼ねていた」(⑬大曲)、「木がまったくないんだもの」(⑬A大曲)、「薪もあまりないので」(⑬B土手内)。

証言のなかで注目すべきものに、「燃料としての1シーズンの必要量をはるかに超える量のサルケを採掘した」というもの(④大曲)がある。「2反歩採った時には小屋に入りきらず、使えるものを捨てるのは本意ではなかったが、道路まで運び、捨てた」という。田地の改良を優先した象徴的な例である。「1年に2反歩程度採取したが、1年分の燃料の量としては余量だった」(③金曲)という同様の証言が他にもみられた。

必要量以上に採取した場合には、2人一組でモッコで運搬し、道路に廃棄したという(④大曲)。また、捨てる場所のない人は田に盛り上げておき、「田に盛り上げると稲を植えられないから、その場所を円く残しておいて、まわりに稲を植えた」(④大曲)という。これらは土地改良を急いだ極端な例かもしれない。多くの人々は、土地改良を最大の課題としつつ、燃料としての必要量とのバランスを勘案し、更には労働力の問題や、客土(混土)の稲作への影響などの問題を加味しながら、土地改良と燃料採取のペースを経験的に調整しておこなっていたと考えられる。

B. 時期 採掘の時期は、春の耕起前との証言が多数を占めた。この場合、採掘したサルケは田のクロに移動しなければ田植えができない。なかには、採掘したサルケを田に積んだままの場合もあったといい、サルケの周囲に円く稲を植えていったという(④大曲)。これは、稲作よりもサルケの採取を優先している事例である。稲作への影響がないように、サルケを採る田と稲作の田とを別にしたという事例(⑬大曲)もあった。

田植え後との証言もみられた。「田植え後の6月におこなった」(⑬大曲)、「田植え後におこなう。乾燥のため、夏場の天気の良い時でないといけない」(⑳土手内)というものである。昭和30年頃のこの地域の田植えは新暦6月10日頃であった<sup>33)</sup>。耕起前、田植え後などのように、春から初夏あたりにかけて採掘を行う場合は、秋までの時間にじっくりと乾燥させることを考慮した時期設定になっている。

いっぽうで、「稲刈り後に少しずつ田の面を剥ぐ」(③金曲)、「秋であったと思う」(⑬大曲)、「春が中心だが、人手のある人は秋にもおこなう」(⑱土手内)、「秋の刈り入れ後だったと思う」(㉑土手内)という証言もみられた(ただし⑬および㉑の証言は話者の記憶があいまいであった)。収穫後であれば、乾燥のために田にそのまま放置しても稲作への影響がないが、田植え前の採掘であれば、掘ったサルケを田のクロまで移動させなければならない。つまり、収穫後の採掘は、掘った場所で即乾燥できるという利点を活かし、運搬の労力の低減を意図した時期設定であったと考えられる。

C. 場所 田から採取する場合はほとんどである。「200~300坪の範囲」(②金曲)、「1年に2反歩ほど」(③金曲)、「田1枚(1反歩)から3年分が採れた」(④大曲)、「(何年もかけて)家の田の総計2~3枚分から採取した」(⑪大曲)などの証言があった。家庭によって必要とする量は異なると考えられるが、事例④(大曲)では1枚の田を4分割して計画的に採取したというから、田一枚につき3~4年分の燃料に値する量のサルケが採取できたようである。

「新しい原野がなければ採取できない」(①金曲)、「土地を手に入れ、サルケを採取した場所を田畑にした」(大曲⑰)、「田にするために、畑から」(㉒土手内)という証言もある。サルケ採取のためといって田を必要以上に低くすることはできないので、未耕地や畑作地を開田する際に採取した場合もあった。

D. 主体 「一家総出で採取した」(①金曲 男性)というように、採掘は「サルケ切り」「サルケ採り」といって、家族全員で分担しておこなわれた。地面からの掘り出しは成人男性がおこない、運搬や積み上げ、乾燥時の手入れ(ひっくり返す作業)は女性や子どもがおこなった傾向があることが、以下の証言から読み取れる。

「採掘は男性が中心で、女性や子どもは運搬や積み上げを手伝った」(③金曲 男性)、「採掘は男性。女だと二つも持ち上げると重たくて動くことができない。主人が掘り、私は持ち運ぶ役」(④大曲 女性)、「祖父や年配者が採掘した。子どもの頃には、乾燥したものの運搬を手伝った。軽いので子どもでも運べた」(⑥大曲 男性)、「子どものころ、運搬のほか、採掘も手伝った」(⑦大曲 男性)、「採掘は大人。切ったものを運ぶ作業をよく手伝った。湿っていたが、一切れのサイズが大きくないので、子どもでも運べた」(⑬大曲 男性)、「乾燥時にひっくり返す作業を手伝った。手伝うことは多くなかった」(⑭大曲 男性)、「採掘したサルケを高台に運ぶのを手伝った。担ぎモッコで運搬した」(⑮大曲 男性)、「男性が採掘した。男性がおこなうべきものだと考えている。自分は手伝わなかったが、兄が手伝っているのを見た。女性はあまり手を掛けないものだと思う」(⑯大曲 女性)、「父親が採取した。自分自身(女性、子ども)は手伝わなかった」(⑰大曲 女性)、「6～7歳になると、モッコでサルケの運搬を手伝った」(⑱大曲A 男性)、「掘るのは男の人ばかりだった。モッタが大きいで女性には向かなかった」(⑲B大曲 女性)、「大曲では、祖父が採掘していた。男性でなければ難しいと思う」(⑲A土手内 女性)、「土手内では父親が採掘した」(⑲B土手内 女性)、「男性が採掘し、女性は見守った。干す作業は女性がおこなった」(⑳土手内 女性)、「女性が運搬した」(㉑土手内 女性)

ただし、なかには「自分の母親は採掘していた」(④大曲 女性)、「女性で採掘している人もあった」(⑯大曲 女性)、「女性のなかには掘る人もあった」(㉑土手内 女性)という証言があり、女性も作業に従事していたことがわかる。また、掘ることはしないが、「タヂで切れ目入れた」(④大曲 女性)という証言からは、採掘に関わる作業のなかでも比較的力の要らない作業に女性が加わったことが知られる。また、「子どものころ、採掘も手伝った。モッタは大きくて使えないので、スコップで掘った」(⑦大曲 男性)、「15歳頃から父親の採掘の手伝いをした」(⑱A大曲 男性)、という証言からは、家庭によっては子どもも採掘を手伝ったことが窺える(もともと、往時の15歳は「大人」と考えたほうがいいのかも)。

E, 方法

E-1 表土の除去 サルケを切り出すには、表土をいったん除去する必要がある(図5参照)。表土を除くためには、スコップ(④⑦⑱A大曲)などが用いられた。「先にサンボンカで『ツヂホリ』をして」(④大曲)という証言もあった。作土は、取り除いた場所へ戻すのではなく、すでにサルケを採取した窪地に入れられた。「一列目が済むと、二列目を掘り、その表土を一列目の窪地に入れる。二列目のサルケはその上に置いた」(③金曲)、「採った場所に土を落とした」(④大曲)「先に土を切ったほうにサルケを寄せておき、順番にうまくやっていく」(⑱大曲)。これらの証言から、作業パターンを図にしたものが図5である。いわば表土とサルケの層序を「逆転」させる合理的な方法である。

また、畑の畝を作る際のシクボの処理についても、合理的な方法があった。「トガで起こしたシクボを、左右両方から一畝に2枚積み上げる」(㉑土手内)というものである。放置すると翌年までに分解したので、そこに作物を植えたという。泥炭は外気にさらされることで、分解が促された。

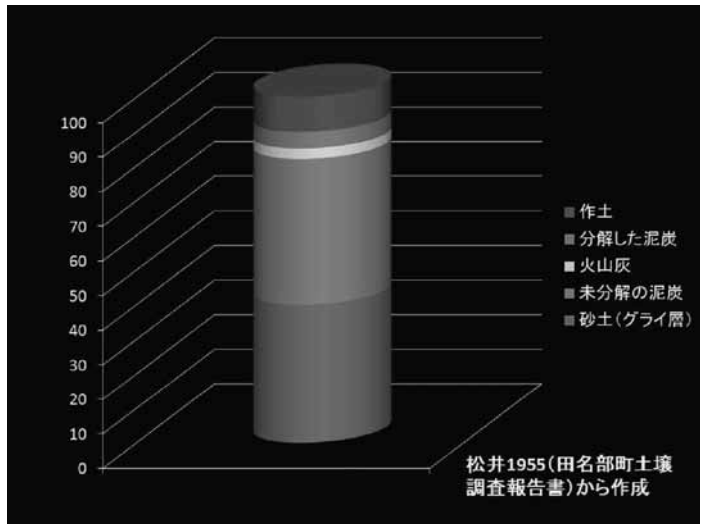


図4 大曲地区の土壌断面図

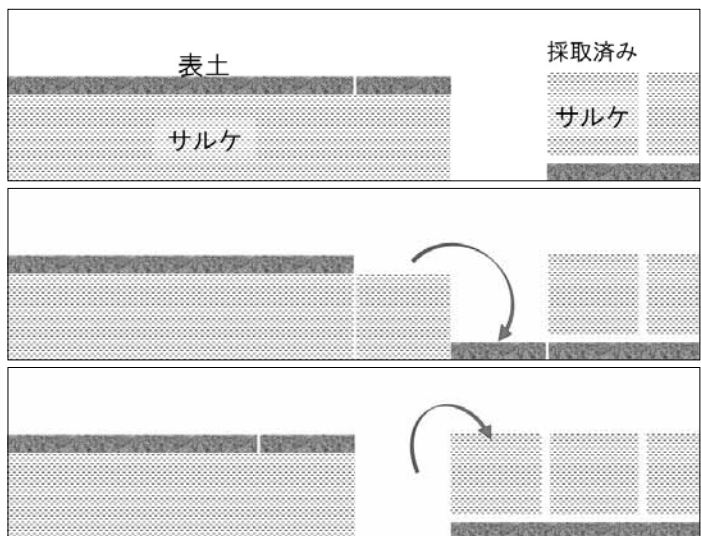


図5 採取パターン

E-2 縄張り と タチ入れ サルケの一切れのサイズがまちまちだと、運搬、乾燥、使用などの面で合理的でない。従って、同じサイズに整然と掘り採る必要があった。そのために用いられたのが、ハリナワである(「張りナワに沿ってタヂを入れた」(⑭大曲)「縄を張り、タヂで切れ目を入れ」(⑱A大曲)などの証言)。また、タヂ(タヅ)は、

あらかじめサルケの層に切り込みを入れ、泥炭層の繊維を切ることで、直線的に美しく掘り上げることを可能にするものである。直線的に切り込みを入れるにはテクニックを要した。大曲の大正生まれの女性は、うまくいかないときに「心が曲がっているからだ」と叱られたという。「私たち（女性）がやると曲がるんですよ。心持ちがまっすぐじゃないって、しょっちゅう叱られて。すると男たちなら、スパッとやるんですよ。手伝いしようと思ってやるんです。だめ。私たちだと曲がってだめなの。スパッといかないんです」（④大曲）。

E-3 採掘 採掘には、トガ（①②③金曲、⑪⑫大曲、⑳土手内）、モッタ（④⑦⑮大曲、㉑土手内）、サンボンカ（⑫⑮大曲）、鋤身に柄が真っ直ぐ付いたスキ・ツグス（⑮大曲、㉓土手内）、スコップ（⑦大曲、㉒土手内）などが用いられたという。津軽地方では「テンツキ」「テスキ」と呼ばれるものが多用されていたのに対し、下北地方では「トガ」や「モッタ」が多く使われていたことが特徴的である。理由のひとつには、サルケを掘り採る深さと場所との関連があると考えられる。「田の水面を合わせるために一尺なら一尺、場所によっては5寸など土地によって深さを決めた」（①金曲）、「採掘は一層分にとどめた（深く掘るとかえってぬかるみがひどくなるから）」（⑪大曲）というように、この地域では土地改良が第一の目的であったために、幾らでも深く掘り下げることがしなかった。津軽地方では、田ではなく溜池から4～5段分（人の背丈ほど）も掘る場合があったことと対照的である。

ただし、なかには「表土（質の悪い泥炭を含む）を60cmから100cmほどスコップで取り除き、質のよい泥炭層に至るとタザで切れ目を入れ、サルケ専用にした幅広のクワで起こした。1mほどの深さまで掘り、サルケを採取した」（⑩A大曲）、「『2番目か3番目か』ははっきりしないが、何段か下の層からサルケを採った」（㉑土手内）という証言もあった。下層にある「よい」サルケを採るために、深く掘った場合もあったようである。

道具で注目したいのは、サルケ採取用に特別に作られたクワである。「7寸トガ、8寸トガと呼ばれる採掘専用製作用のトガ（刃の部分は26cm×30cm程度）で採掘した」（①金曲）、「幅20cm、長さ25-30cmのトガで採掘した。トガはちょうどよいサイズに作ってある」（②金曲）、「長さ60cmほどのサルケ用の特別なクワで掘り上げた」（⑬大曲）、「大きなクワ、モッタの大きなもので掘り採った」（⑭大曲）「モッタよりも大きなクワ（オゴシクワ）で起こした」（⑱A大曲）「サルケ専用にした幅広のクワで起こした」（⑲A大曲）「広く四角いモッタクワで起こした」（㉑土手内）「サルケ掘りのトガは、田名部の町の鍛冶屋に作ってもらったものである」（㉒土手内）。こういった証言からは、耕作に用いる普通サイズのトガやモッタよりも大きなサルケ採り専用のクワがあったことがわかる。残念ながら、筆者は未だ現物を確認していない。

縦	横	厚さ	
21	21	21	金曲①
30	20	6~7	金曲②
30	15~20	12~13	金曲③
30	30		大曲④
30~50	30~50		大曲⑥
30~50	30~50	10	大曲⑦
30	30		大曲⑨
30	30	25	大曲⑪
50	50	20	大曲⑫
		15~20	大曲⑬
30	40	10~20	大曲⑮
30	25	10	大曲⑯
30	30	10	大曲⑱B
30	15	10~15	大曲⑲A
40	25	15~20	土手内⑳
30	30	10	土手内㉑
30	36~39	30	土手内㉒

※空欄は不明  
 ※単位cm 尺貫法はメートル法に換算  
 ※単純に厚さ=深さと考えられない

図6

E-4 サイズ 採掘されるブロックひとつのサイズはまちまちである。右表にまとめた。一边を30cm程度、もう一边を20cmから30cm程度とするものが多い。これは、津軽地方で見られる傾向とおよそ一致している。ただし、厚さについては、10cm以下のものから20cm程度とするものが多い。津軽地方では厚さを30cm程度とするものが比較的多く、異なる傾向がみられる。その理由のひとつには、採掘の場所や目的の違いがあると考えられる。なお、①金曲では「掘り採る厚みは、田の高さに応じて決定した」、⑫大曲では、「厚みは乾燥時の縮み具合を考慮した数値である」との説明が聞かれた。

(6) 乾燥

サルケの乾燥は、採掘後にある程度脱水するための乾燥と、本格的な乾燥、あるいは更に保管を兼ねた乾燥を加えた2～3段階にわたっておこなわれたことや、水切り前のサルケは、非常に重たく、採取した田地や田のクロに置いてある程度乾燥させてから移動したほうが合理的であるということが、次の証言からわかる。「一週間ほど乾燥させてから、3～4分割し、掘り上げた場所で完全に乾燥させた。その後、ニオのように積み上げて風通しをよくして保管した」（①金曲）、「道路に五角形にハイヅミし、乾燥後はあらためて大きく野積みした。これを『本積み』といった」（③金曲）、「1尺四方のものを三分割して三角形に立てて乾かした」（④大曲）、「田で乾燥させてから、家に運搬して乾燥させた」（⑩大曲）、「1m以上の深さから高台に上げて乾燥させた。合わせる形で立てかけ、ある程度乾燥したら、ハイヅミにした。その後家に運搬し、積み上げてよく乾燥させた」（⑮大曲）、「水を切って積み、乾燥させた。水切りした後、女性が田のクロの上に並べて乾燥させ、その後高い場所に移してふたたび乾燥させた」（⑱B大曲）。「4～5月頃から、6～7月ころにかけて、ひっくり返しながらすっかり

乾燥させた」(㉓土手内)。

採掘した直後のサルケを「ナマ」と表現するものがあった(③金曲)。同様の表現は「(廃棄したサルケが) ナマのうちに歩くでしょ。すると、ぬかるんですよ」(④大曲)という証言でも聞かれた。静岡県藤枝市では、人の手が加わる前の泥炭を「ナマもの」と表現することが思い出された。いっぽう、筆者の津軽地方での取材では、乾燥前と乾燥後を区別する表現は聞かれなかった。

④および⑬大曲の証言は、「三角に」あるいは「合わせる形」で立てかけて乾燥させるというものである。津軽地方では金木町嘉瀬でこの方式(スモコトラヘルかたち:相撲を取らせるような形)を採用した事例があった。事例㉓(土手内)では、直置きしたものを、ひっくり返す作業が必要だったという。女性や子どもがこの作業を担当した。筆者の調査では、津軽地方の車力村下牛潟でもこの方式が採られていた。

本格的な乾燥の際には、サルケの塊の端と端の間隔をあけてレンガ状に積む方法が多くとられたようである(②金曲、⑦⑫⑬⑯A大曲、⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖土手内。ただし㉒は土手内居住の話者が大曲で見た事例)。その理由は、風の通りをよくするためであると語られた(①金曲、⑬大曲、㉓土手内)。また、積み方については、「正方形にレンガ積み」(②金曲)、「上部が四角錐に見えた」(㉑土手内)、「円形」(⑫⑬A⑯A大曲、㉒㉓土手内)、「富士山のように積んだ」(㉓土手内)との証言があった。乾燥と保管のために積み上げたものの名称については、筆者の聞き取りでは「わからない」という回答が多かったが、



積まれたサルケ。昭和38年頃、北大曲付近。  
撮影年・撮影場所は『むつ市史』による。写真提供：むつ市

「ニオと言った」(⑬大曲A)という人もいた。津軽地方ではこれを「サルケニオ」と称している。

内部は空洞にして(⑬大曲A、㉒㉓土手内)乾燥を促したという。また、高さは「1メートル程度」(⑫大曲)、「120～130cm程度」(⑬大曲A)、「140cm～150cm」(⑯大曲A)、「人の背丈よりも少し高いくらい」(㉑土手内)という証言が聞かれた。また、覆いを掛ける場合(①金曲⑬大曲A)と、掛けない場合(②金曲⑫大曲)の違いもみられた。いずれにしろ、内部を空洞にして円形に積んでいく方法は、筆者の津軽地方における調査では聞かれなかった。

田の中や、田のクロにそのまま野積みして乾燥させる人もあれば、一次乾燥、二次乾燥、そして本積みをし、保管を兼ねた乾燥(ホンカワキ)をおこなう場合があったようである。乾燥の回数や各段階でとる置き方(積み方)の方式は、個人により異なった。

## (7) 運搬

運搬は乾燥後に行われたという事例が多くを占めた。乾燥後は重量が軽くなるというメリットがあったと考えられる。運搬の時期は、秋から降雪前が多かった(②金曲、⑥⑦⑫大曲)。田から道路への運搬にはモッコ(⑦大曲)、道路から家までの運搬には荷車やリヤカー(⑥⑦⑨大曲)が用いられた。冬期に運搬する場合には、ソリが用いられた(⑬⑯A大曲)。モッコなどを用いて人力で運搬するという事例(⑪⑬大曲)もあった。これは、田と家屋が比較的近い場合であった。子ども達も運搬を手伝った(⑥大曲)。津軽地方では、自宅に運んでから乾燥させるという事例もみられたが、今回の調査ではそのような話は聞かれなかった。ただ、自宅に積み重ねて数年置くことにより、更によく乾燥させたという話は聞かれた(⑬大曲)。

## (8) 保管

採掘後から運搬までの間の保管(兼乾燥)は採掘場所付近での野積みが多かったが、運搬後の保管場所は小屋であった(②金曲、③④⑨大曲)。

## (9)用途

## A, 燃料

A-1, 暖房（採暖） 燃料としての用途のひとつは、暖房（または屋内外での採暖）である。今回の調査で、サルケを暖房（採暖）に使用したと回答した話者は①②③金曲、④⑥⑦⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑯⑰⑱B大曲、⑲B⑳㉑㉒㉓㉔㉕土手内の21名にのぼった。炉で焚かれるにしる、ストーブで焚かれるにしる、サルケの用い方はさまざまであった。サルケだけを焚くのではなく、別の燃料を加えたという事例も多くみられた。併用されたのは、流木（③金曲）、山から採取した木（④⑫大曲、⑲㉑土手内）、松の根（⑪大曲）などである。ユニークな事例は、土手内地区における埋没樹木の利用である（⑲B㉑土手内）。湿田に沈んでいる埋没樹木の根株を引き上げて乾燥させ、利用したというのである。水分を吸って重いため、半分ほど地面に引き上げて乾燥させてから、ノコ挽きしたという。地下から生み出される燃料はサルケばかりではなかった。埋没樹木は地下に眠る貴重な燃料であったが、反面、田起こしの際にはやっかいな代物だった。引っかかるとバッコウが壊れてしまう危険があったため、その対策（装置の工夫）もなされた。

暖房（採暖）は、早い時期にはイロリでおこなわれたが、昭和30年代半ば以降は、これらの地区で一般的に用いられる燃料は、およそサルケから薪に変わっていたようだ。また、それに伴い、火を焚く道具として既成の薪ストーブが用いられるようになった。イロリの上にストーブを設置し、燃料にはサルケを用いた（②③金曲、④⑤⑥⑦⑨⑩⑬大曲、⑲B㉑土手内）という場合が多い。ストーブは、既製品の薪ストーブ（④⑥⑨⑩大曲）のほかに、手製のストーブが複数の家庭で作られていた。「ドラム缶みたいなものに穴をあけて、鍋をかけて焚いた。100%のドラム缶を半分に切ったもので、口を適当に開け、ぼつぼつと穴をあけた。焚き口は四角形に開けた。」（金曲② 図7）、「（昭和20年ころ）ドラム缶半分に切ったものを使った」（金曲③）、「（他家では）ドラム缶で作った人もいる」（大曲⑥）、「父親が、どこからかトタンを貰ってきて、二箇所を針金で留めて円くしたものを作った」（土手内⑲B）という証言がある。土手内㉑の場合、トタン板から手作りしたものであったため、いびつな円筒形で、焚き口もなかったという。薪の上にサルケストーブをのせることで、空気の通り道を確保した（図8）。ところが、火力が強危険なため、「これならかえて危ないな」「普通の炉のほうがいいな」ということになったという。手製のサルケストーブには煙道が附属していないため、煙を屋外に排出できるというメリットもなかった。

ストーブの導入とサルケの使用との関係でユニークなのは、㉑（土手内）の事例である。この家では、それまで木山から得た薪や田の中の埋没樹木を燃料として使用していたが、昭和29年頃に薪ストーブを購入して以降、サルケを使い始めたという。時代に逆行するようなパターンである。薪ストーブに煙道を附属させ、煙の排出ができるようになったため、それまで忌避していたサルケを焚くようになったそうだ。

聞き取りでは、当時の人々が生活に必要なさまざまな道具を手作りしていたことがわかったが、これらの簡易ストーブもそのひとつである。

ストーブ以外の暖房（採暖）具としてはには、容器に入れてこたつに利用した人もあるという（金曲①）。また、屋外での採暖に用いられる場合もあった（土手内㉑）。「昔、長靴も手袋もない時代、田植え時に隣の家で焚いているサルケの火にあたらせてもらった。ホコホコと暖かった」という。

A-2, 炊事 暖房（採暖）のほかに、主要な用途として炊事がある。聞き取りでは、①②③金曲、④⑥⑦⑨⑩⑫⑬⑭⑯⑰⑱AB大曲、⑲B⑳㉑㉒㉓㉔土手内で炊事におけるサルケの使用を確認した。このうち、③金曲、④⑨⑫⑬大曲、㉑土手内の事例では、サルケのほかに木を併用していた。使用する理由として、大曲④の事例では、「ゴウゴウと燃えず、グツグツしてダメだから」という説明があった。炊事の際には、薪とサルケは1対1ほど使ったという。煮立ったあとは、木をあまり使わず、サルケの勢いで燃やしたそうだ。同様に、大曲⑨の事例では、「他の人はサルケばかり燃やしていたが、嫁いで来る前は木で焚いていたため、上手に焚くために木と一緒に焚いた」という。話者は横浜町出身であったため、薪で炊飯することに慣れていたのである。

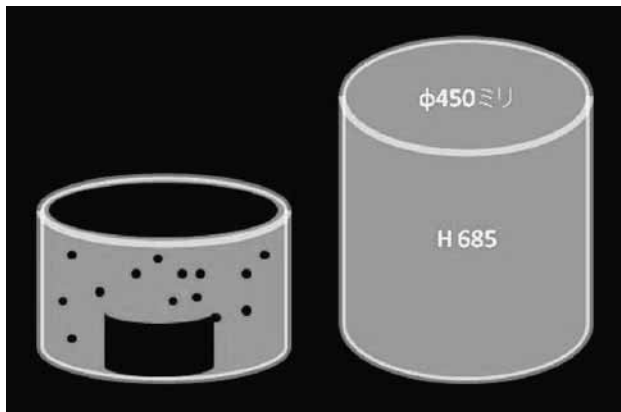


図7 手製簡易サルケストーブ（金曲②）



図8 手製簡易サルケストーブ（土手内⑲B）

炊事場所は、多くの場合炉であり、道具は鍋であったが、暖房器具としてのストーブの普及にともなって、炊事もストーブでおこなわれるようになったという事例が多かった（②③金曲、④⑦⑪⑫⑬大曲、⑳土手内）。ストーブ導入以降も炊事道具として鍋を使用していた（②金曲、⑥⑨大曲）場合と、ストーブ導入以降はツバガマを使用するようになった場合（④大曲、⑳土手内）があった。少数ではあるが、「サルケを炉で焚かず、玉石を積んでアカカベで作ったカマドで煮炊きするとき用いた」（⑬大曲）という人もあった。

燗火は調理に用いられた。「私が18～9の頃は、どの堰を掘っても泥を上げると、フナが沢山でできた。捕って焼いて食べて、フナを焼いたものをミソカイヤギにして食べて。家に持ってきたら串に刺しておけば、サルケの燗火で自動的に焼けた」（大曲⑱B）、「サルケの煙がなくなってしまうと、炭のようにになるので、魚を焼いたり、灰の中にジャガイモやソバモチを入れて食べた。電子レンジで作るものよりもおいしい」（土手内⑱B）、「サルケの火の下のほうは、ホカホカしているので、ジャガイモをしたに入れておいて焼いて食べる人もあったそうだ」（土手内⑲）。これらの証言からは、サルケの燗火も調理の火として活用されたことがわかる。

### A-3 風呂焚き

燃料としては、風呂焚きにも利用されたが、事例は少なかった（②⑦⑨大曲、⑱B土手内）。筆者が秋田県の横手市でネッコ（泥炭）の用途について聞き取りした際に、開口一番に風呂の燃料という人が多かったことと対照的である。横手では、ネッコで焚く風呂はお湯が柔らかいのだという説明を聞いた。下北の大曲では、夏場は川に入り、冬は「味噌を煮る釜」や「ドラム缶」に湯を沸かして入ったという人もいた。ただし、これらの燃料は薪であった（⑨大曲）。

### B, 燃料以外の用途

泥炭の用途は多様である。世界的には、麦芽の乾燥、敷藁、泥炭紙、泥炭ローソク、皮鞣し、窯業、アルコールの抽出、充填剤、浄化剤、脱臭剤、建築材料、保水剤、泥炭浴などの利用法が知られる<sup>34)</sup>。

B-1, 土木・建築材 「堰を塞ぎ止めるために使用した」（⑳土手内）という事例があった。湿気と重みがあり、びったりと塞げるのでよいのだという。サルケを2～3個を並べた上に、板を敷いて用いた。しかし、自然素材であるため、1年程度しか持たなかった。昭和30年頃にマンタイ袋が使われるようになってからは、用いられなくなったという。県外や海外では、壁や屋根などの建材として使用される事例があるが、筆者のこれまでの調査では、そのような話は聞かれない。ただし、津軽地方で家の軒下に積み重ねたという話を聞いた。保管とともに断熱材としての効果を得ていると見ることもできる。しかし使用者からはそのような認識は示されなかった。

B-2, 土壌改良、肥料 サルケの灰は、肥料や、酸性に傾いた土壌の中和剤として用いられた。植物遺体が腐植する際に腐植酸を出すので、泥炭土は酸性となる。稲はわりあい酸性に強いが、畑作ではとくに中和が必要だった。そしてこの地域（旧田名部町地域は約2000町歩の農地のうち、1120町歩が畑）は馬鈴薯や大豆や野菜などの栽培が盛んな地域であった<sup>35)</sup>。「灰を溜めて、畑にカリにして撒いた。灰は堆肥になる」（③金曲）、「田んぼでも畑でもいい。肥料になる。今でいえばリン酸みたいなもの」（④大曲）、「ジャガイモを植える時に使った」（⑨大曲）、「今なら石灰を撒いたりするけど、昔はよく畑に灰を撒いたりして使った。今でもジャガイモなどを植える人は灰がほしいと訪ねて来る」（⑪大曲）、「灰を田んぼに撒いて肥料にした。灰を保管する場所も作った」（大曲⑫）、「畑を作ったりするとき撒いた」（大曲⑬A）。大量に出るサルケの灰は有効活用された。

B-3, 消雪 ③金曲では、雪消しに利用したという事例があった。

B-4, あく抜き 「イモを切った時、灰を付けるといいらしい」（⑪大曲）と語る話者がいた。灰をイモのあく抜きに利用したという話もあった。下北地方では明治時代以降、イモ（ジャガイモ）の栽培と利用が盛んになったが、この話者の家もクズイモからイモノコナをとり、イモモチにして食べたという。

薪とサルケを比較したときに、燃焼時の灰が多量であることをマイナス面として語る場合（④大曲）もあれば、利点として語る場合（⑪大曲）もあった。多量に出る灰は、シノ（ふるい）をかけ、袋に入れて溜めておいたという。保管には注意を要した。「恐ろしいんだよ、この灰というものは。下手に捨てると、火事の原因になるんだ。カマスに入れておいたら火事を起こすところだった。恐ろしいものだ」（金曲③）と語る人もあった。

### (10) 火の操作

A, 着火 サルケは（そのサルケの質にもよるが）一度火がつくと燃え続けたが、着火が難しかった。そこで、着火の際には木を用いたという話が多く聞かれた（①③金曲、④⑱AB大曲、⑱B土手内）。他に、着火剤として杉の葉（⑬大曲）や、火のついた炭（⑳土手内）なども用いられた。火をつけやすくするために、サルケをハの字形に立てかけること（①金曲）や、割って盛り上げる（②③金曲）といった方法が用いられた。小さく割ることも工夫のひとつで

あった（⑪大曲、⑳土手内）。サルケを割る場合、手やナタ、タヂなどが用いられた（⑪大曲、⑳土手内）。

B, 維持 「一度火がつくと、特に手を掛けなくても2時間以上燃えた」（⑫大曲）、「朝から晩までよく燃え続けた」（⑭大曲）というように、火を維持することは比較的容易であったようだ。また、サルケの火力は非常に強く、よく燃えたと語る人が多い（①②金曲、⑪⑫⑭⑯B大曲）。逆に弱いと語る人はわずかに1名に過ぎなかった（③金曲）。「柔らかいものは着火が容易だが火力がなく、堅いものは火力がある」（④大曲）という証言もある。採取されたサルケの質にもよるのであるが、この地域のサルケはおおむね非常に良く燃え、また持続性も良かったのではないかと思われる。「火力を上げるときには木を加え、弱火の場合にはサルケのみの火にする」（④大曲）というように、燃料の調合や使い分けがおこなわれた。

C, 始末 火の始末については今回の聞き取りのなかでは語られることがなかった。灰については、処分の際の取り扱いについて注意が必要だった（（9）B-4参照）。

#### (11) 副産物

A, 煙 サルケを使用した人々にとって、もうれつな煙はとりわけ強く印象に残っていることがらのひとつである。炉で使用する場合には、室内に煙がもうもと立ちこめた。よく乾燥していないサルケは特に煙が出た（⑬⑯大曲）。「燃えてしまえばいいが、（火を付けた時が）すごく煙くて、家の中も煤だらけになった」（⑱大曲）というように、特に着火時がひどかった。そのため、屋内は煤で真っ黒になってしまった（⑬⑯大曲）。しかし、屋内にもうもと立ちこめるその煙こそが暖かいのだという話も聞かれた（⑱大曲）。

いっぽうで、煙は気にならなかったという人もいる。「草屋根だからあまり気にしなかった」（⑩大曲）「煙に直接あたるわけではないし、ストーブで煙を外に出していた」（⑪大曲）。家屋の構造の違いや、煙突の導入の有無によって事情は異なっていたようだ。

ストーブを導入しても、煙突を取り付けないという家庭もあった。その場合、煙はストーブから屋内に放出された。



メクサレの神様（むつ市大字田名部字斗南岡、妙見神社）

「煙突付いてないんだもの。ほとんど煙突ないんだもの」（②大曲）、「ストーブ付けたのに煙突ぐらい付けたらいいのに、それもやらなかった」（⑰大曲）、「（ストーブを作ったのはいいが）煙突もないし、普通の炉のほうがいいなと（思いました）」（⑲土手内）。ながらく炉を使用していた地域の人々には、煙を外に排出するという思考がなかったようだ。

サルケから出る大量の煙は、「メクサレ」（目のやまい）の原因になったと考える人もいる。「メクサレが多かった。本当にあの煙によってメクサレになった」（⑫大曲）、「目が赤くなってしまった」（⑲土手内）、「あの煙だから、目も悪くなる」（⑳土手内）。

眼病平癒を祈願して「お宮に行く人もあった」（㉒土手内）といい、なかでも「<sup>さいばな</sup>最花の妙見様」（所在地は斗

南岡である）は「メクサレの神様」として地域の人々の信仰をみつめていた。最花地区は、大曲や土手内と同じく泥炭地である。最花でも昔はサルケを採取し、燃やしていたという証言がある（むつ市大字田名部字最花、昭和5年生、女性）。しかしこの女性が昭和26年に同地区に嫁いだ時には、すでに利用されていなかったという。「最花というところに、妙見様という神様があって、5月17日というところのお祭り、ほとんどこのあたりの人は妙見様にお参りした」（⑫大曲）。

B, 臭気 独特のニオイはまた、サルケの代名詞であった。「くせえニオイ」「特殊なニオイ」「焦げくせえニオイ」（③金曲）、「熾のようなニオイ」（⑥大曲）、「何ていうか変なニオイ」（⑫大曲）、「クサイ」（⑯大曲）、「ニオイでわかる」（⑰大曲）などの証言は、このニオイが良いニオイではなかったことを物語っている。

このニオイは、他からこの集落を訪ねて来たひとびとにとって、嗅ぎ馴れない独特のニオイであった。「富山の薬屋さんが、この集落に入ってすぐにニオイがして、どうしてこの集落はこんなニオイがするんだって」（④大曲）、「（嫁いだころ）何か変なニオイがするなと思っていた」（⑫大曲）、「田名部（現在のむつ市中心部）のマチの人は、大曲に来ればサルケのニオイがするって、よく喋った」（⑭大曲）、「いつどこで焚いても、ニオイでわかるって」（⑰大

曲)、「よその集落に何か用事があって行くと、『あ、サルケを燃してるね』『サルケのニオイがしてる』って、よく言われた」(⑩土手内)、「ニオイがするんだもの。こっち(土手内)に来れば」(⑪土手内)。

学校では子どもたちが、体や衣服に染み付いたニオイについて、揶揄されることがあった。「子どもの頃、服を着て学校へ行くんですが、ニオイがするんです。ものすごくニオイがするんです。何かニオイがするなあって、言われたことがありました」(⑦大曲)、「ストーブの上に着物を掛けて、学校に来るとニオイがする」(⑨大曲)、「学校に行くとみんなに『大曲の人クセえ、メクスレだ』って」(⑫大曲)、「学校に行くと臭い、泥臭いものですから、イジメにあいましてね。それで泣かされたことがよくありました。『クサイな』と言われて。泥臭いんだもの。煙のニオイが体に染みついて。」(⑬大曲)。これらは、感受性の強い子ども時代の体験であればこそ、いっそう強く話者の心に刻み込まれている体験であった。

大人同士でも、サルケのニオイが取りざたされることがあった。下北郡X村から土手内に嫁いだ女性は、実家に帰省すると「サルケくせえ」と言われたという。「私が土手内に嫁いだのを聞いて、X村の人が、『お前達隣に来たらサルケくせえ』って冗談に。そう言われたことがあった。だから、『嫁ぎ先の)家ではサルケ焚いてないよ』って(言いました)。」女性の嫁ぎ先ではサルケを焚いておらず、したがって実際にニオイがしたのではなかった。土手内という、サルケの利用が盛んな地域へ嫁いだ女性に対する、冗談半分のからかいであった。女性もそのことは理解

していた。しかし、言われた当の本人は「馬鹿にされたみたい」な気持ちになったとも語る。土手内よりも余裕のある暮らしを営む人たちの、いわばそのゆとりや優越感から出たのであろう悪気のない、しかし配慮に欠けた冗談に対する反感もあったのだろう。「X村の人たちは金持ちだから」「X村の人はまた、金持ちばかりだったね」という語りがそれに続いた。山地に囲まれ木に恵まれたX村に対し、土手内ではサルケで燃料の不足を補わねばならなかったし、土手内の人が仕事をもらいに通った先はX村であった。サルケにまつわるからかいは、こういった集落間の生活レベルの違い(それに対する意識)をも、背景にしたものようである。

盆おどりは、娯楽の少ない時代の、男女の交歓の場であった。田名部まつりまでの1ヶ月間、連日連夜、おどりの輪ができた。そこでうたわれる盆唄には、次のような歌詞があった。「いつや寝るたて 津軽衆と寝るな サルケカマリの子ができる」(⑫土手内)(図9)。大曲や土手内など、サルケを焚いている地域の人(ルーツは津軽である)が輪に加わると、南部衆は対抗意識をもってこの歌をうたい、自分たちをアピールしたのだという。「土手内や大曲の男たちが入って、歌うとなれば、わざとそうやって歌って、ヤキモチ焼くようにして」「津軽衆の男がくると、ヤキモチ焼いて、南部衆の人をモテさせるために、そうやって歌った」(⑫土手内)。

C, 灰 (9) 用途 B-4 参照。

#### 4. 反省と課題

調査で出会った34名の方々の話を通じ、この地域におけるサルケの利用とそれをとりまく事象がいかに多様であるかを垣間見ることができた。「お金もない、道具もない。あだらしシャツこ着がな、どもっても、着れないの。なんもないどごから立つのは大変な話だの」という大正生まれの女性(④大曲)のことが象徴するように、そこには、燃料の不自由さを含めたさまざまな苦勞に直面しながら生活を切り拓いてきたひとびとの、力強く生き生きとしたダイナミズムがあった。下記に留意しながら、学習をすすめていきたい。

### 盆唄

♩=82

伝承地 むつ市土手内  
伝承者 女性(昭和8年生)  
採譜者 増田公寧

いつやねる たて ハア ドー シタド シタ

つー がるしゅ うどコリヤ ねる な さるけよ

さるけかまりの コリヤ それさ よ --- こが

で きー る よ

図9 盆唄